学生大使 実施報告書

氏名：平子舞夏
学部・学科（コース）・学年：地域教育文化学部・文化創生コース・3 年
派遣先大学：ラトビア大学
派遣期間：2025 年2月27日～2025年3月13 日

1 日本語教室での活動内容

平日 16:10～17:40 と17:50～19:20 の一日2回、日本語教室の活動を行った。日本語教室に参加してくれるのは、ラトビア大学に通う学生から、長く自分で日本語を学ぶ社会人まで幅広い年代の方が参加をしてくれた。また、そのレベルもさまざまで、日本に留学経験があり流暢に日本語を話す人もいれば、アニメや漫画を使って日本語を覚え、独学で日本語を勉強している人もいたため、一人ひとりのレベルに合わせた交流を行った。ほとんどの人が「会話の練習をしたい」「日本についてもっと知りたい」と伝えてくれたため、会話ベースで日本の文化や食べ物、観光地、音楽、アニメなどさまざまなジャンルの会話を楽しんだ。また、日本のことだけでなく、ラトビアのことについても質問し、日本とラトビアのことを比較しながら話をすることができた。上級者とは、将来どんなことをしたいか、どんな人になりたいかについて語り合ったことも印象深く、お互いの夢を応援し合えたことが嬉しかったとともに、彼らの日本語の習得レベルの高さには驚いた。

また、日本でよくやるトランプや手を使った簡単なゲームをしたり、持参したかるたやけん玉、習字を一緒にやったりして、日本文化を実際に楽しく体験してもらえたことが良かったと感じる。

2 日本語教室以外での交流活動

日本語教室は、夕方からだったため、日中は自由に過ごすことができ、日本語教室を通して仲良くなった学生とご飯を食べに行ったり、街を散策したりした。休日には、海や動物園、宮殿といったリガ市外に連れていってもらったりもした。仲良くなった学生の1人に、自宅で親が陶芸教室を開いており、そこでアルバイトをしているという学生がいた。その学生が、「ラトビアの良いお土産になると思うから、ぜひ作りにおいで」と誘ってくれ、陶芸体験をさせてもらった。ラトビアやリガの街を散策することも良いが、このような出会いから、自分だけのお土産を作ることができたことは特別な思い出になった。

また、私たちが生活をするアパートにラトビア人を招いて、ラトビアの伝統料理の「ビーツスープ」をみんなで作ったり、私たち日本人がお好み焼きを作ったりして、みんなでパーティーをしたことも印象的である。そのパーティーのような日本語教室外でのみんなとの交流を通して、たわいのない会話やゲームを楽しむことでより交流を深め、日本の友人と同じくらい仲を深めることができたと感じる。

3 参加目標への達成度と努力した内容

今回の参加目標は、「関わる相手のことと、ラトビアという国のことをよく理解して、自分の価値観を広げること」を掲げていた。今までアジアの国にしか行ったことがなく、ヨーロッパに行くことがはじめてであったため、西洋の文化や暮らし、パーソナリティーに興味があった。

まず、関わる相手のことについて理解することは、日本語教室に参加してくれる一人ひとりがどんなことに興味をもって、どんなことが好きなのかを引き出しながら会話を進めていったため、概ね達成できた。その人が興味を持っていることについて、日本人だからこそ伝えられることをたくさん伝えることができたし、相手を知ることで自分とは違う考え方や価値観に出会うことができた。

次にラトビアという国について、ラトビアの歴史は複雑で、街を歩いているといたるところでさまざまな国の影響を受けていることを感じることがたくさんあった。特に旧市街には、由緒深い建物が多くあり、事前にガイドブックでどのような建物なのかを把握したうえで現地に行ったが、写真からは伝わってこなかった迫力があり、想像をかきたてられた。現地の人との会話での気づきもあり、渡航前よりもラトビアの文化や歴史について理解を深めることができたと感じる。

4 プログラムに参加した感想

美しいヨーロッパ建築と石畳の道、主食の小麦やジャガイモ、日本と比べられないほど広い公園でのびのびと過ごしている現地人、散歩しているといたるところから聞こえてくる音楽など、日本では見られない光景ばかりで、刺激的な日々であった。そのような環境で、現地の人と一緒に過ごすことで、よりその国のことを知ることができ、普通の旅行ではできない体験や本やインターネットからは知り得ない学びや気づきがたくさんあったことがとても良い経験となった。

5 今回の経験を踏まえた今後の展望

今回の経験から、関わる人や国について理解しようとしたり想像したりすることの大切さを感じた。今後、多様性の時代に教育に携わっていく上で、人とのコミュニケーションを大切にして、相手のことを理解しようとしたり想像したりすることで物事の見え方や感じ方が変わっていき、柔軟な対応ができるようになるのではないかと考える。今回、異文化に触れ、複雑なバックグランドを知って、価値観を広げることができたことは、今後さまざまな人とコミュニケーションをとるうえで役立つと感じる。今後も積極的にさまざまな人と出会い、挑戦することを継続していきたい。

また、現地の言語を話せることに越したことはないが、少なくとも英語が話せることで、コミュニケーションの幅が広がることを改めて実感したので、語学学習にはこれまで以上に積極的に取り組んでいきたい。

6 現地での活動写真

写真1

オペラハウス

写真2

ビーツスープを作ったとき

写真 3

習字

写真 4

最後の日本語教室